ヨーロッパの午後

内藤秀夫

1

スイスの午後

ジュネーヴの空は明るく晴れていた。春先の強い風が縦横にレマン湖の方から吹き募るかと思う、とジュラ山脈からこの高台の家に吹きおろしてくる。
こうして午後の一時を水晶のような冷気に包まれて過ごしていると、まるであの燦々としと降り注ぐ太陽の光は形だけで、力を失ったように、寡黙な天の恵みを地上に分け与えているようだ。
こうして遅い春がやってきて、様々な希望と期待に充ちた一日が重ねられていく。
窓から見下ろす路を散歩する人も、春の陽の暖かさを求めて足早やに通り過ぎていく。　しかし杖をついた老夫婦は厚い黒外套に身を包んで歩いていく。 まるでその歩みは地球の歩みを押し止めるかのように、一歩々々ゆっくりとしている。
去年の秋の名残りの枯れ葉が、カサカサと音を立て、時折吹き募る風に煽られて飛び散る。　少年たちの元気のよい喚声が近づいてくる。　自転車を漕ぎながら話に夢中になって議論している。　そろそろ芽を吹き出した躊躇いがちなレンギョの薄緑の中を見え隠れして去っていく。 春の息吹はそれでもそこここに身られるのだった。
冬の最中でも緑の絶えなかった近くの牧草地にも春の輝きが感じられる。　しかしジュラやレマンから吹きだす北風は、湖と山を見張らすこの高台の家々の窓を固く閉ざしてしまう。
レマンの西方には純白に装ったモンブランの山塊が木間に見え隠れしている。

2

ジュネーヴ便り
第一信一九六九年九月
ジュネーヴに来て大して経たないのに、もう永いこと住んでいるような気分がするのは不思議です。ジュネーヴの街はスイスの他の都市例えばチューリヒなどに較べると、規模は小さいのですが、それほど騒がしくもなく、家並の一個建の家屋には、他に見られるような気取りがなく、私のいるグラン・サコネ (Grand Saconex) は国連欧州本部、世界保健機構、國際赤十字などを見下ろす高台にある古い屋敷街ですが、古い石塀などに苔が生え、蔦がから

み、一寸見には中の庭なぞも放りっぱなしという雰囲気があり、それがまた
いかにもスイス風んの三階もあろうかという大きな急勾配の木造家屋などで、
ひっそりと老後を過ごしている夫婦の生活を想像させたりするのです。
事実、パレ・デ・ナシオンのすぐ前にある大きな白川部落の家屋を想い出させるよ
うな、チロル風の装飾を家のまわりに施した家などは、老夫婦二人だけで
住んでいて、夜などそばを通ると二階の窓に木立を通してぽつんと灯がつい
ていたりします。
チューリヒからジュネーヴのコルナヴァン駅に着いた時は天気がよく、レマ
ン湖の対岸から吹き上げ名物の噴水がよく見えました。それから数日たって
気がついたのですが、それ以来吹き上げている様子がありません。レマン湖
畔には何度も行きましたから当然見ているはずなので、私には理由が分かり
ませんでした。その後分かったのですが、噴水はその日の風の具合と天候を見
て吹上げるのだそうです。曇っていると効果が悪いのでまず水を出しませんし、
風向きが変って、街に噴水がかかる場合は直ちに止めるのだそうです。まだ
存分に見ることができないのを残念に思っています。十月に入ると噴水も土
曜以外は止まってしまいます。ジュネーヴの秋の気配は東京近辺のそれと時
期的にも殆ど変わりないように思いますが、徹底して曇りのどんよりした日
が秋の終り頃から続いて冬の季節に移ります。レマン湖畔の白鳥たちが、昼
休みの人々の手から餌を食べ終えて、羽の手入れを満足そうに念入りに始め
る頃、人々は漸くベンチから立って午後の仕事に戻ります。穏やかなレマ
ン湖畔も少しキビキビした表情を取り戻します。
マロニエの木の実が道路にごろごろしていて、うっかり踏みつけると転びそ
うになります。私のいるグラン・サコネの閑静な舗道にもたくさんのマロニ
エの実が、とれた皮と一緒に散らばっていて、歩いていると時折からからと
音を立てて道にはじけて散ります。栗に似た大きな実で、林の中で子供たち
が面白そうに紙袋いっぱいに拾っていたり、バスの中に持ち込でいるのを見
かけます。
グラン・サコネには牧草地がフランス側に向かって展け、黄色い花をつけた
草が一面に生えていて、近所の牛舎の茶と城のぶちの牛達が草を食んでいま
す。またそこから少し坂道を下った奥深い林の中には、シャトーのような立
派な造りの建物がたっているのに、緬羊の一群が集まって草を食み、ジュネ
ーヴの郊外とは言いながら、スイスの面目躍如としています。
日曜日の朝は近くの小さな教会の鐘が鳴って日曜礼拝の子供たちが着飾っ
て集まり、教会は小さな自転車、ヴェロソレックス、自動車で囲まれます。
ジュネーヴの日曜は宗教的な雰囲気で包まれ、普段、着慣れない背広だと一見
して分かる人もいたりして、素朴な信仰の生活を思います。
例の牧草地の一端を通り、ポプラ並木がつづくプレニィ通りは、郊外に向か

う車が先を急いで、ローザンヌ、イヴェルドン、ヌーシャテルへ走り去りま
す。こちらの高速道路は完備していて、一二〇キロぐらいで走れますから、
ジュラやヴォーの地方に簡単に週末旅行に出かけられるのです、プレニィ通
りに出てすぐの所に、勝手に私が名前をつけて、友人たちにも承認を得たシ
ャトー・ド・プレニィがあります。ポプラに取り囲まれ、石塀をつたう燃
えるような赤い蔦の葉の対照は実に素晴らしいものです。相当古いらしく、
博学の英人のデイヴィッドが言うには、この舘に一、二年ヴォルテールが滞在
したものだそうですが、真偽のほどは計りかねます。しかし絵にしてみようと
いう誘惑には打ち克ちがたく、一枚ものしたところです。それから石壁と細か
く敷き詰められた石畳の道をしばらく行って坂道にかかると、レマン湖の対岸
とニオンの方角を望む広い眺望が得られます。上から見るレマンは、静かにヨット
の帆を浮かべ、対岸の木々の好もしさと共に、落ちついたたたずまいです。
岸辺の木々は紅葉を待っているのですが、ぼつぼつ山の上から始まる紅葉が湖岸
に到るには、まだ時間がかかりそうです。
ジュネーヴの近くには、あまり葡萄畑は亡く、ローザンヌやヌーシャテルな
どでは広い葡萄ハタアケが収獲を待っています。グラン・サコネから一キロ
踊行くともうフランスとの国境なのですが、その途中には林檎園が多く、も
う終り近くて、路端には林檎がごろごろしています。近所の子供たちは自転
車などで遊び廻りながら、中には、あわよくば落ちるのを受けとめようと、
じっと木の下で上を見上げている女の子がいたりして、子供たちの表情には
屈托がありません。此方の林檎は実が小さく、赤くはなりますが、多少すっ
ぱいので、殆ど林檎酒などの原料に使われるのです。
ジュネーヴの秋は比較的長く、景色も一番落ちついた美しさを発揮するよ
うです。夕日がサレーヴの山の数条の白い断層を赤く照らす時、その左肩に
モンブランの既に白い山容が赤く青い空に浮かび上がり、その更に左側に
モンブラン山系の鋸歯状の山々が連なっているのが遠望されます。
スイス客地どこでもそうですが、有名な城や寺院などは一晩中照明が当て
られていて、暗黒の中に赤々と浮かび上がる様は、もう絵葉書でご承知でし
ょう。湖水の畔りに点々と並ぶ灯、そしてまだ空の青さを残している夕暮れ
時のモンブランとレマン湖のたたずまいは趣のあるものです。レマンから流
れ出すローヌ河の流れはなかなか速く、水量も多く、立派な河なのに、道行
く人々はローヌ河などにはおよそ興味はないらしく、河に背を向けて新聞を
展げている人もいます。

ヌーシャテルの葡萄祭
第二信一九六六年十月
ジュネーヴに来てはじめての日曜日にヌーシャテルの葡萄祭に出かけることになりました。車で二時間程度の所なので簡単に行けてしまいます。ジュネーヴの人々は冬になると、シャモニーなどは日帰りでスキーを楽しみに行きますし、その意味ではここは最適な場所なのです。ジュネーヴ大学にも、「パリへの同乗者求む」などという掲示が出ていたりして安く行くことができます。
イヴェルドンまではオートルートが快速で、途中の風景もよく、絵葉書にあるような、なだらかな緑の丘の起伏の続く中に、農家や形のったシャレーが車窓を過ぎて行きます。どの家の窓にも赤い花が咲いていて、年中花を絶やさないようにしていることが分かります。
車窓の左側に見える低い山なみは、もうフランス領で、その麓は高い糸杉に囲まれた農家が色とりどりに散らばっています。フランス領に入ると、街お中でも時折馬車が見られるそうですが、木々や家屋の様子が、いかにもフランス南部の柔らかく、暖かい雰囲気を伝えていて素朴さを感きさせます。
途中、イヴェルドンを過ぎて、ヌーシャテル湖を望むレストランで中食を済ませえて、午後にヌーシャテル湖に着いた時には、もう湖岸沿の歩道は車が街の中心から続き、白い手袋をつけたおお巡りさんが車を待ち構え次々に来た順に道の片側に駐車させていました。遅く来れば、町まで相当歩かなければならないという訳です。
町に入ると流石にお祭りらしく、きれいに飾られ、ソーセージ、ポップコーン焼き栗などの屋台が町の中心に向かって軒を並べていて、雑踏を味わい、東京を思い出すこと頻りです。広場には遊園地ができていて、メリーゴーラウンド、射的など大人も若者も子供たちも浮き浮きとし楽しげで、ラウドスピーカーのマーチ唄声が町を包んでいます。
祭り自体は町の中心の一部を仕切って入場料を取り、その中でだけいろいろなフロートがって廻るという趣向です。その中の一番の目抜き通りは指定席になっていて、そのすぐうしろはヌーシャテルの湖水が岸を浸しています。フロートは花で飾られたものがおおく、各カントンから参加し、例えばジュネーヴのフロートは深紅のさまざまの花で飾られ、純白の衣裳を着けた五人の美女がバレーのポーズを取るといった趣向のものでした。その合間に幾つもの素人のブラスバンドがスイスの衣裳を着け賑やかに行進してゆく、お祭り気分は盛り上がります。
通りすがりの人に紙片をぶつけ合ううのも無礼講というわけで、早速１フランで紙袋いっぱいのを買って投げつけると、スイスの人はまさか東洋人からぶつけられようとは思いませんから、本当にびっくりした顔をします。し

かしわれわれもよくやられました。しかし女性は髪にくっついて取るのに苦労するせいか、、ぶっつけられそうな気配だと、われわれの手にじっと目を注いで近付いてきます。中には子供を先に歩かせて用心している婦人までいましたから、余程あと始末に困るのでしょう。
したがって葡萄祭とはいいながら、わずかにあるフロートが大きな葡萄樽をのせて葡萄酒をサービスして廻るぐらいで、あまりそれらしい雰囲気はありません。もっとも葡萄の収獲はこのお祭りのあとということですし、年に一度のお祭りとして近郷のスイスの農家の人々も大勢集まり、大いに騒ぐというのも、いつも秩序正しい生活をしているスイス人にとっては大きな楽しみなのです。
しかし全体として町は浮き立っているのですが、個々の人を見ると普段のスイス人と変わらないように見えます。矢張りスイス人の楽しみはこうしてそれぞれ分を守って、いついかなる時でも節度ある態度をくずさずに祭りに参加するということでしょうか。仕切られた街区の外から、たくさんの人が鈴なりになって建物の合間に見えるフロートを静かに眺めているのは印象深いことです。日本のお祭りではまず皆無と思われますが、スイスでは例えばジュネーヴでも街区を仕切って入場料を取るそうで、われわれの想像外のことです。
祭は夜も続きますが、時間を考えて五時頃帰途に着きます。ヌーシャテル湖は、今日一日の快晴の名残りに青空の下で、まだ陽に映え、祭りをよそに白いヨットのお帆が悠々と風をはらんで湖を進みます。
ローザンヌの近くのシオンの城を見る積りで、ローザンヌに出てレマン湖に沿って走るオートルートに入りましたが、時間が遅いのでそのまま帰途につきます。モルジュを過ぎ、古い街並の残るニオンの町に入ると、もう陽は落ちて、曲がりくねった石畳の道を街灯が照らしています。
ここでも葡萄祭でフロートの通たあとらしく色とりどりの紙吹雪で埋まっています。祭の後の倦怠が、そこここに、壁に凭れて立っている若者達を支配しています。カフェのテラスでは灯の中で祭の後を楽しうように、石畳をじっと見つめ、葡萄酒のグラスを傾ける人の長い影がテラスんに落ちています。残念なことに立ち寄る時間がありませんでしたから、そのまま通過しましたが、その背後に照明されてくっきりと浮び上がったニオンの城も、祭の終わった静かな街を慈しむように見下ろしています。
レマン湖畔を走って、ジュネーヴの対岸の一列の灯の湖水に映るのが見えて来ると、快晴に恵れた一日も終わりです。そして今夜の葡萄酒も格別にうまいことでしょう。

4

ジュネーヴの音
第三信一九六七年一月
ジュネーヴばかりでなくスイスの音楽は、ローザンヌに本拠を構えるスイス・ロマンド管弦楽団とエルネスト・アンセルメに代表される感がありますが、特にアンセルメがローザンヌ大学の数学の教授として年を経てからスイスのオーケストラをはじめて組織したという点、まだ歴史的に若いという感じがすることは否めません。
しかし、若きモーツァルトをはじめ、数多くの音楽家が訪れたジュネーヴには、スイスの他の都市に比べて、音楽の伝統が、音楽愛好家の心を育ているものがあります。ジュネーヴを訪れる多くの交響楽団、ソリスト、そして有名なピアノコンクール、管弦楽コンクールなど、ジュネーヴの音楽シーズンはどれも聴きたいものばかりですが、ジュネーヴの人々にとって、いながらにして聴けるのですから仕合わせです。むろんこれはヨーロッパの大部分の都市についても言えることとで、また現在の日本もほぼそれと似た状況にあるでしょう。
ジュネーヴの音楽愛好家を特色づけることと言えば、これらの古典音楽を愛する人々がかなり上流の階級に属する人達で、特に若い年代の人々は日本と比べて極めて少ないことが目立ちます。従って、音楽会の学割などというものも、ジャズやモダーン音楽のものならば有り得ますが、この種のクラシックでは対象にならないのです。もっとも値段は高くても十五フランぐらいですから、東京の水準からすれば安いと言えます。
ジュネーヴのこうした愛好家の中には、やはり自分で楽器をいじり、音楽を体で知っている人も少なくなく、それも若い人々は難しいせいか少ないようです。その例が、時々当地の新聞などにもその活動が取りあげられるアマチュアのオーケストラ、サン・ジャン・ド・ジュネーヴです。私は幸いに許されて、毎週木曜日の夜八時半からの練習に時々出かけてチェロを弾いてきますが、その練習風景はいずこも同じで、音楽は國際言語であることを、身をもって体験しています。
オーケストラ自体は、東京のそこここにあるアマチュアのオケと変わりなく、モーツァルトを好み、バッハをよく演奏しますが、音は流石にいいものを持っています。チェロを弾く人はもう三十年弾いていると言い、また相当の年配の人がヴァイオリンやヴィオラを弾き、ワグナーを思わせるベレーをかぶった白髪のおじいさんは、かくしゃくとしてホルンを吹いています。オーボエなど実にうまいと思っていると、ジュネーヴのコンセルヴァトワールの学生のエキストラだったりして、その点は日本のアマチ

ュアオーケストラと変りありません。
言葉はみなフランス語で、指示などもフランス語で言われるのもなか
なか面白い経験です。このオーケストラは、時々、ジュネーヴ郊外の小さ
な村に出かけて演奏会を開きますが、バスで出かける演奏旅行は愉快で、
週末のたのしみも一層です。英国人の若い友人はヴァイオリンを弾いてい
ますが、彼もジュネーヴの國際機関で働きながら、音楽をするたのしみを
棄て切れずに集まる一人です。時々彼のアパートに出かけてはレコードを
聴き、いろいろ議論をして夜を過ごすのも、雨の多い暗い日の続くジュネ
ーヴでは、時たま早朝の身を切るような冷気の中に姿を見せるモンブラン
山塊のように、心を洗われるような気分にしてくれるものです。この友人
のレコードの中に、モーツァルトのオーボエ・カルテットや、ヘンデルの
アレクサンダーフェストのような好きなレコードを発見します。
更に、スイスロマンド放送局では付に何回かスイスロマンド管弦楽団
の生の演奏を放送しますが、その際は五〇サンチームで手軽にスタジオで
演奏が聴けるのですよく出かけます。楽員も平服で、思い思いの格好で気
軽です。
木曜日の午後は、私は音楽を聴く機会が多いのです。例のオーケスト
ラの練習もそうですが、私の住むグラン・サコネのシュマン・デ・クレ
小路の曲がり角にある簡素な様式で、スイスふうのとんがり屋根の時計台
をもつ教会では、通りがかると、よく演奏をしているのが聞こえます。
それがある時にはバッハのフルートとオルガン通奏低音付のソナタであっ
たり、ハープのアンサンブルだったりして、ついつい通りがかりに聴き惚
れてしまうのです。スイスの教会はは殆んどと言ってよいほど立派なパイ
プオルガンを備えていて、どんな小さな教会でもその調べが流れます。
私がジュネーヴに着いた夜は、スイスロマンドの演奏会が、ヴィクトリア
ホールであり、チューリヒからの列車の中で新聞を読んで知っていた
私は、夜になるのを待ちかねて出かけました。一時間ほど遅れて休憩の
時間になっていました。正式には入れませんでしたので、外に出て休んで
いた楽員に頼んでバックステージから入れてもらい、ジュネーヴの第一夜
は、かくしてチャイコフスキーの第五番シンフォニーで幕を開けたという
訳です。ヴィクトリアホールはたいして大きくはなく、古い金色彫刻をほ
どこした装飾と暗い赤のモールがちょうわして、落ち着いた雰囲気を感じ
させます。四階までぐるっとオーケストラを取り囲み、演奏する楽員の間
近で聴くということは、東京でのコンサートに慣れたものにてって、今ま
での概念を根本から覆えされます。音楽がこれほどまでに聴衆に親しみ深
く暖かく迎えられるのを見たのは、私にとってはじめてのことです。聴衆
は決して多くはなく、思い思いの席に座ってきいています。女性はイヴニ

ングドレスが普通で着飾っています。
私はその後、東京で縁あって知り合ったロンドン交響楽団のコントラバス
奏者ヌートセンと、ジュネーヴに同楽団が演奏旅行にやってきた際に、不意
打ちの再会を果たして彼を驚かせましたが、ヨーロッパは彼らにとっては最
早外国ではなく、このような演奏旅行もイギリス国内を移動するのとさ
して変わらず、彼自身は先年の日本演奏旅行ほどの興味は全く感じないと、
あまりおもしろくなさそうな顔をしていました。彼らの演奏旅行は、その
翌日には別の国の都市へ行って、確かにヨーロッパは最早、国を越えた共
同社会であるという印象を強くし、またヨーロッパ合衆国という構想の根
強い根拠も、一面では否定できないものがあります。しかもそれが歴史的
にも古い構想であることを思う時、いよいよその感を深くします。
やがて春の訪れとともに、ジュネーヴの音楽シーズンも終りを告げます。
花々に囲まれる家々の窓も朝日の輝かしい祝福を希い、レマン湖の岸の
マロニエの枝先から新芽が出はじめ、春先きの、霞に煙る街々のシルエット
に一際、聖ピーター寺院の緑青の尖塔が、春の陽光に聳えるのが見ら
れるでしょう。、

5

サティニーの夕焼け
第四信一九六七年春

ジュネーヴの郊外十キロ程のサティニーは、ジュネーヴのコミューンの
中でも最も古い方に属していて、葡萄畑がなだらかに続き、点在する林の間
にシャトーが見えかくれする穏やかなな丘陵地帯です。北西間近かにジュラ
の連山を、南東にサレーヴの山、その背後にモン・ブラン山群の一角が望め
ます。
私はある晴れた午後、若い友人のレイモンの家庭に招かれて、サティニーの
彼の家をはじめて訪ねました。コルナヴァン駅から殆ど人の乗っていない
CGTE (スイス国鉄)の電車で市街を抜けて、少し荒れた野原を走り、点在する
林と家々を見ながら十分ほど載ると、もうサティニーの駅で、ひところの東
小金井の駅を思わせるホームに降りると、そこから彼の家は五分ほどです。
踏切りを渡ると、向うからレイモンと弟のローランが走って迎えに来るのが
見えました。
レイモンの弟妹は七人で、私はこのゾーレル一家を訪ねるまで信じられ

なかったのですが、これはスイスの家庭では滅多にない珍しい家族構成で、彼の両親がスイスアルマンのトゥーン地方の出身であることで説明されるのかも知れません。大部分のスイスの家庭は、子供は二、三人が普通で、他のスイス人に聞いても、七人という子供には目を丸くします。
レイモンの家は小さいけれども実に能率よく造られた三階の屋根裏のあるシャレー式のとんがり屋根のブロック建築で、まわりは菜園と花壇で囲まれた傾斜地に建っており、窓からはフットボール競技のグリーンの芝生と、銃の射撃場が見え、その向こうの林の上にサレーヴとモンブランの一角が望まれます。
子供はレイモンを頭に、ミシェル、ローラン、ヴェロニク、ガストン、ジューディット、ナタリィの男四人、女三人で、両親と母方のお祖母さん、それにミノーキーという犬と猫、兎など何とも大変な数の家族です。という訳で、お母さんのエレーヌもなかなか大変ですから、子供達にはそれぞれ仕事が割り当てられていて、十才の四男のガストンは私の傍にいたくて仕様がないのですが、長女のヴェロニクや次女のジューディットなどがうるさく呼びに来るので、渋々諦めて立ち上がる様子は可愛らしいものです。ガストンは名前からしていかにも強そうですが、山とスキーが大好きで、近くのジュラ山脈にお父さんと登っては、推奨水晶や太古の貝の化石などを探し歩いて、今は沢山の標本を持っています。早速自慢の水晶の大きな塊まりを持ってきて見せてくれます。
お父さんのオットマンも化石など自慢のものがあって、ガラス戸を開けていろいろ見せてくれますが、なかなか見事なものです。今年の夏のヴァカンスや週末には私も連れて行こうということに忽ち相談がまとまってしまいます。
お父さんのオットマンは仏語、スイスアルマン、スペイン語を話しますが、どちらかというと、スイスアルマン語を好むようで、ジュネーヴの化学香料工場の技師です。彼は何万に一人とかいう調香師で大変な鼻利きというわけです。
お祖母さんはスイスアルマンしか話しませんが、お母さんのエレーヌが私どもと話をする傍ら、スイスアルマンに素早く通訳してあげます。子供達は、上の四人はスイスアルマンが大体使えるようですが、下の子供達はまだちんぷんかんぷんで、あまりスイスアルマンを喋っているとすねてしまいます。しかし躾けがいいのか、大人の話には加わるものではないというけじめがあるのか、おとなしくしています。
尤もお客の私自身、スイスアルマンは皆目見当がつきませんし、ドイツ語を知っていても分からないというほど違うそうですから、そんな状態は長く続かず、直ぐにフランス語に戻ります。スイスアルマンは村ごとに違

うといわれ、それを話す人びとの間でも分からない言葉があるそうで、三十幾つかの方言があると聞いたことがあります。文法も一定したものはなく、それを文字に表わすのも不可能で、それを用いた文学も殆どないというのが実情です。しかしそれでもなお、スイスロマンドの本拠であるジュネーヴで、スイスアルマンを聞く機会が多いのは、一寸不思議な気がします。
友人のレイモンは二十歳の若さですが、現在モンブラン郵便局に勤めています。三ヵ月間の兵役を済ませてからトリビューン・ド・ジュネーヴ紙の記者になるそうで、現在まで幾つかの記事を紙上に書いています。なかなか好感のもてる知的な、元気のいい青年でんで、青年活動に多くの興味と行動を示しています。スイスの兵役は二十歳で約三ヵ月勤めた後、毎年三週間の義務を果たします。レイモンの場合は郵便局に勤めている関係で通信兵んということですが、一方次男のミっシェルは、機械技術の養成研究所へ行っているので航空兵を志願するようです。
このように職種によりその技術に応じた兵種に当てられる訳です。
日本には兵役はないと聞くと、みな不思議な気持ちを抱くようですが、しかしここでは兵役も一種のコミュニティの連帯感の基盤としての役割をもっているように思います。
ミッシェルの部屋は全て飛行機で充満していて、プラモデル、写真で飾られ、その熱意のほどがうかがわれます。恐らく来年の今頃は小さいパイパーカブで大空を飛び廻っていることでしょう。

6

ヒスパニア・ エキスプレス
1968年1月
國際急行列車 ヒスパニアエキスプレス号は正午の定刻に二分ほど遅れてフランクフルトの高い丸天井の構内のプラットフォームを離れた。
彼の乗ったコンパートメントは初めは彼一人だったが,発車寸前に英国人のスポーツマンらしい大柄な男が二人乗り込んできた.。　久し振りに英語を聞くと彼は思った。彼らは屈託なげに話しを交わし,マイン川を渡る頃にはもうシートに寄りかかって眠る算段のようだった。
フランクフルトは寒かった.。　　空模様はグズついて今にも雪が散らつきそうで寒々としている。
マインの流れの向うに赤黒いバーソロミュー寺院のドームが見えた。 ここ暫くのお別れだと思って眺める。中世の昔からこのドームの形は変わらず,当時のリトグラフの構図そのままだ.。　温か

いというよりも蒸し暑い位に暖房が通った室内は専ら眠気を催すのに役立つばかりだ。
窓のガラスについた水蒸気が水となって外の窓枠に白く凍りついている。　列車のスピードが一段と加速されて外の風景は降り初めた雪の中を斜めに飛んでいく。
ドイツの都市の郊外には必ずといってよい程たくさんの小庭園が並んでいる。 そこには思いおもいに作られた小屋が建っていて,色とりどりノ塗られており,様々なアイデアを取り入れている。
そんな小さく仕切られた庭園が雪の中に埋もれているのが窓から見える。　夏に見る時はあんなにも生きいきとして,庭の持ち主がデッキチェアで日光浴をしたり,水撒きをしていたのに今は何という寂ししさだろう。　まるで戦後のバラック小屋を思わせる眺めだ。
ワルシャワからウィーンに入った時,その郊外に同じような区画が広がっていて,ヨーロッパには未だこんな収容所を思わせるようなものがあるのだろうかと疑ったことを思いだす。
このような庭園を得ることはさ程難しいことではないらしいが,後は時間と何でも自分で作り,庭の植物を手塩にかけるこまめさがいるだけだ.。　もし自分にあの20 平米ほどの庭があって,小奇麗な小屋を建て , どうせ家などは持てないだろうから,週末をゆっくり過ごせたらどんなに楽しかろうと,彼は窓外の冬枯れの松林を眺めながら思う。
フランクフルトの市内にもそれに類するものがあって,パルメンガルテンの裏手に金網や板の柵で囲われた庭が続いている。　毎年七月初めになるとどこの小庭園の持ち主も,各々所属する庭園組合毎に或る一夜ガーデンパーティを催す.。その日は日頃散歩の途中に眺めては羨ましがっている人々ものこのこ中に入って主人の接待を受けることができる楽しいお祭りである。 こうして都市に住む人々も日頃緑のない生活だが,週末を庭仕事に精を出すことで自然に触れる機会を持つことになる。これで野菜の栽培にでも手を出せば一石二鳥というもの。この制度はウイーンでシュレーバーという人が初めたといわれ,別名シュレーバーガルテンとも呼ばれている。ドイツ語圏では市町村の有休地をそのために安い地代で貸し出すことが習慣になっている。
自然を好み、山や丘,森の中の散歩というよりもむしろハイキングに近い散歩をするドイツ人にとっては当然なのだろうと思われた。ワンダーフォーゲルの発祥の地とはいえ、ドイツ人の家庭を訪ねてこの種の散歩に誘われないことは先ずない。
「近くにとってもきれいな大きな森があるから一寸でかけましょう」と云って,小さな子供まで乳母車に乗せてそれも二キロや三キロは楽に歩く。　もっともその見返りにブルーベリーやグースベリーのたわわに実った所があって,好きなだけ食べられるというような思いがけない果報があったりする。　　そしてこちらの足も慣れたと思うのか,今度はもう少し大きな散歩をしようと云って,或る日シュヴァルツヴァルドの奥深く ,紀元二世紀頃の古城の遺跡に連れていかれたりする.。　　しかしこれは実に楽しい客のもてなし方だと彼には思われた。　無論余り重なると少々閉口するけれど.　　実際 ドイツ人は 週末によく歩く。.
フランクフルトから電車で三十分ほどにあるクロンベルグは美しい森となだらかな丘に囲まれた田園都市で,週末は人で溢れる。 冬はソリ遊びで電車の中は行楽の人達で満員になる。

列車は相変わらず単調な響きを続けている。カーブを切るとき足元からキーと車輪が軋るのが耳障りなだけである。目をつぶって眠ろうとするがそんな雰囲気ではない。雪がだんだん激しくな

って吹雪になろうとしている。窓外は松林の中をでたり入ったりしながら進んでいるがもうオーデンヴァルドらしい。それにしてもこの松の姿は日本のそれになんと似ているのだろう。雪をかぶった松を見るとまるで日本の風景の中を走っているような気持ちになる。松の木は日本独特なものと思っていたがそうではないようだ。いまこの車窓を横切るまつの林は北海道の赤松と同じもののようだ。北海道の松は冷たい風に吹きさらされて枝ぶりは申し訳のようについていて、幹は赤い頬をした子供のそれと見間違うようだった。煉瓦色の鱗肌を幹に巻きつけ常緑の葉を載せているのだった。彼は北国の海辺の町で育ったからよく知っているが、２，３本の赤松が立っている丘から海を見下ろしている風景は、見る者になにか孤独を連帯に変えて人を勇気づけてくれる不思議な力を持っているようだった。海から吹き付ける、塩漬けになるような針が突き刺さるブリザードの来襲は、都会の人間は冬山で味わうものと思っているようだが、彼の育った北国では冬の間じゅう日常茶飯事のことだった。それは何も珍しいことではなく、吹雪の吹きつける方向に顔をしかめながら、とにかく真っ直ぐ歩くということ以外に考えの余地のないものだ。もちろん奏していては呼吸ができくなるから、横を向いて息をし、そのままでは前が見えないからやむおえず立ち向かう。これは何のことはない空中で水泳をしているようなものだと思った。こういう厳しい時はあっても、晴れの日は楽しいものだ。つららがポツンポツンと溶けて、の木下の雪に無数の穴を開ける。彼はそれを窓枠に腰掛けながら眺めていた。太陽の光を集めてつららの先端からキラキラ迸ばしり，こんな日がこれから続くように思われた。猫が雪の上を恐る恐る抜き足差し足忍び足で新雪の上を歩いてみようとするのもこんな日だった。春が近い頃だった。この猫は前の家から引っ越した時に、見えなくなったので逃げ出したのかと思って、気にとめずにトラックを走らせて到着すると、満載の荷物にの上に乗っかっていたらしく、いの一番に新居に駆けこんだのには驚いた。捨てられては困ると早くからトラックの上に隠れていたのだろう。猫の知恵には笑ってしまう。けれどこの猫は格別に頭が良いと皆にいわれていた。
車窓の風景はどこか大きな街に入ろうとしているらしく、煙突をたくさん並べたアパート群が白い風景の中で銅版画の絵のように浮かんでみえる。ダルムシュタットだった。この街には彼の友人がいる。ウリと言ってウルリッヒの短絡形だが、彼はフランクフルトに住むフィアンセの古い友人で、ダルムシュタットにある技術学校の講師をしている。

7

プロヴァンスへの旅

1968 年以来、実に32年振りにこの旅に出られることになったことを喜んでよいのか、まるで過去への清算の旅に なるような複雑な気持ちである。 あの当時はフランスには高速道路網などはなく、地面を這うような道路で、そ れを不自然に思うようなこともなかった。 当時はジュネーヴで働

いていたので、今時のようにドイツ縦断する 苦労はなかった。 ミュールーズからリヨンの間の高速の休憩所で夜休んでいると、仏警察のパトロールに、夜中 泥棒が出没するから気を付けろと警告されるようなこともなかった。 寝しずまった頃に窓を開けて、金目のもの を盗むのだそうである。照明されているサービスエリアがよいというので、また暫く走る羽目となった。 お茶を沸かし、夜食を作り、スーパーで買ったコートデュローヌを飲みながら、昔はこんなに何でも揃ったキャ ンピングカーでゆっくりするようなことは考えもしなかったなアと述懐する。 何しろトイレ、シャワー、冷蔵庫、ガスキッチンまで装備されているのだから。 翌朝からまた走り、高速に飽きて昔からヌガーという砂糖菓子で有名なモンテリマールで降り、街道に出ると、 昔の雰囲気がまざまざと蘇ってきたのには驚いた。 名物ヌガーの店が昔のように立ち並んでいるではないか。 当時はこの街道しかプロヴァンスに通じる道路はなかったから、大変な混雑だったのである。 昨夜はジャンダル ムに嚇かされて、ジュラを貫く高速を夜通し走ることになったので、このモンテリマールのキャンピング場は夢 のようだ。 シャワーを浴びてサッパリし、当地のスーパーで買ったムール貝を調理して食べると大変満足。 パス テイスの水割りを飲みながら寛ぐと、若い頃に返ったような気がする。フランスミュジークのFMを聞きながら、 時代の変遷を改めて回顧する機会を得たことを感謝する。
昔よく吸った煙草のジタンをつい買ってしまったが、青箱のフイルター無しのものしか売っていなかった。 ケースには《法令91.32によると喫煙は他人に迷惑を及ぼし、健康に有害である》と今どきの煙草に全てあるよう なことが書いてある。 ところがたまたま内箱の裏を見ると、《このタバコは何にも変っていない。 フランスタバ コの不変な、1910年以来の伝統的なジタンの味は続いている》と書いてあるではないか。何と不敵なメッセージ か。 フランス魂を見る思いがする。
永いことドイツに住み慣れていると、如何に多くのものが失われたかを今に して痛感する。 それは一体なにか ？ ラジオは盛んに夜の星座を見る催しを伝える。 ミデイのどこかの山頂にある天文台で夜空を見るらしい。 てこのキャンプ場から見た南仏の星座は見事なものであった。 しかしこの放送を良く聞いてみると、ここ1週間程 の間、地球は大変な数の流星群に突入するということである。 北西の地平線上で夜中過ぎから良く観察できると いうことであったが、残念ながらその方角は阻まれていて見ることはなかったが、どこかで見るチャンスはある だろう。 そのかわり双眼鏡で満月に近い月を見る。 こんなに近くで月を見たことはない。 午近くキャンプを出てアヴィニヨンに向かう。 有名なアヴィニヨンの橋も久し振りだが停まることもなく、アル ルに向かう。 雲一つない晴天で温度計は35度を指しているが余り暑い感じはしない。 モンテリマールのキャンプ は電気も使え、温水シャワーも完備していて58フランで済んだ。 安いものだ。 南仏はもっと混んでいると思って いたので喜ばしい限り。 ルートをはずれるとこんなものだろう。 アヴィニヨンからアルルに向かう途中ゴッホ が画いたような向日葵畑や糸杉の風景が点景する。 その中に香水博物館というのがあり、寄ってみる。 ここにはアランビックという銅製の蒸留塔の古いものが沢山収集されている。 本来ならニースの近くのグラース という町が香水で有名だが、ここにミュゼーを作ったというのも何か理由があるのだろう。 持主はアロマテラピ ーの始祖だそうで、タバコの消臭のためのアロマもあるそうだが買わなかった。 アロマテラピーの日本語訳が 売られて

いるのが印象的である。 ここまで来る日本人がいるんだろう。
アルルでは町にできるだけ近いキャンプに入れたのが良かった。 明日は町まで歩いていける。
クルマを動かすのは億劫だ。 ここはプールまであり賑やかである。 夕方ははっきり海風が吹いて海が近いことを感じさせ 30 度 もあるのに気持ちが好い。 またラジオが流れ星が最大になるそうで観測には最適だそうだ。
今日はアルルの街に歩いて行く。 10分位で何ということはない。案内所でぱんふれっとを貰い、コロセウムや野外劇場は外から見学する。 何も中に入ることもあるまい。 ローマやヴェロナやオランジュのものは既に見ている。 そのかわり アルル博物館は丹念に見て廻る。 1667年のコロセウムの絵をみると、外側は勿論、中まで家を建てて住んでいた奴がいたのには驚いた。 当時は文化財などという概念はなく、遺跡の石材は勝手に盗んで建材として使ったのだ。 中世はどこでもそうするのが当たり前だったので、ローマの恩恵は後代まで続いたことになる。 麦ワラ帽を買った店のマダムに闘牛の話を聞く。 闘牛はコリダというが、本式のスペイン闘牛は牛を殺す。
しかしポルトガル式は牛を殺さすさず、闘牛士が最後に手で牛の角を制して終わるという。 明日土曜はアルルのコロセウムでコリダがあると広告されているが、スペイン闘牛らしいので行くのは止める。 力を付けるために毎日昼食はオントルコットだが、今さら牛を殺すのを見る気はしない。 夜はキャンプのレストランで初めてフランス語のカラオケを見聞した。 日本のようにレーザーデイスクがあり、特に子連れの若い女性二人が卓越している。 遅いバラードを見事に飽きさせず聞かせる節廻しは、演歌のそれと対等である。 デイスクジョッキーがいて 進行係りを務める。 夜空は少し雲があって残念ながらアルルは元々はケルト族が支配していた街であるが、シーザーが遠征してガリアの小ローマとして軍団の古参兵を置いて植民地化し、キリスト教の中心地として繁栄した。 ローマの崩壊後12 世紀になって再興、活性化した。 18世紀に豊かな都市貴族が勃興し、現在の旧市街が建てられ、その魅力を2千年の今に残している。 コロセウムは紀元80年に造られ2万人を収容する。 近郊にあるアリスカンプは古代のキリスト教の墓地で、《私のアリスカンプ》 という概念は、ヨーロッパ人の根源という意味で良く使われ、思想家のよく書くところでもあり、コンポステラの聖ヤコブへの順礼の起点ともなっている。 今夜の空は月も出ず、雲が掛かって、雨が降るかなと思っていたら、夜中降り続いた。 洗濯物は残念ながら乾かない。 フランスミュジ--クは隣町のサンマルタン デ クロウ の実況中継で、プロコフイエフの3つのピアノ協奏曲をポーランド国立放送管弦楽団で放送している。 実は一ッ走りして聞きに行こうと思ったのだが、億劫になって止めたのである。 実況中継で聞ける とは幸運である。 夜中過ぎまで演奏したのにはビックリした。 開演は9時半だから無理もないか。 オケは良く弾いている。
全般にプロヴァンスは宵ッパリである。 スペインはもっとひい。 朝はゆっくり起きてカマルグに向け出発する。 今日 は土曜日で、フランス人は週末に帰省する習性があり、みな血走って運転しているのが分かる。 週末に移動するのは賢明ではないが、仕方ない。 途中でカマルグ博物館なるものがあり、見学する。 受け付けの女の子に1時間半程の見学コースと博物館があって、今のうちなら気温が高くないのでコースを歩いた方がよいというのでそうする。 コースは蚊が沢山いて、東洋人を特に好んで吸血する習 性がある。 ロゾウという葦の草を手折って振り回しながら

見学するが、不思議なことに出逢った人は唯一人青年だけで誰もいない。 潅漑と塩田の歴史が16世紀以来ということが分かった。 そして牛、馬、羊の放牧が専業ということも分かった。 博物館自体は100メートルほどもある葦葺きの長い小屋である。 昔羊を囲っていたそうで、越冬したり、羊毛を加工したりするものである。 中には沢山の見物客がいる。 どうも誰も例のコースを1時間も掛けて廻るなどという酔狂なのはいないことが分かった。 入口には例の女の子がいて意味あり気に微笑したのが印象的であった。 カマルグの首都 サントマリードラメールに向かう途中、乗馬の案内が沢山あり、結構乗る人がいて繁昌している らしい。 この街に着くと大変な人出で、まるで江ノ島に来たような感じがする。 このキャンピングカーは2トン 半もある大きなものなので、人出のなかを走るのに難儀する。 どうもここのキャンプは町中を縦断した端にある ようだ。 ラ ブリーズというキャンプに入る。 受け付けの女の子はドイツ語がペラペラで、ドイツに一年いたこと があるそうな。それにかまわずフランス語で端折ると直ぐに認めてくれて大変親切に応待してくれる。 まあ滅多 に日本人が来ることもないだろうし。 所でアルルは日本人の観光客が沢山いて昔懐かしい感じがした。 プロヴァ ンス風の反物屋では買物の手伝いをしてあげたっけ。 町までは10分程海岸を歩く。 この旅では初めて地中海を見る。 浅瀬の海岸には沢山の人が海水浴をしている。 町は結局旧市街全体が御土産店の連続ということである。海岸際に何やら見覚えのある円形の建物があり、闘牛場と直感した。 その通り、しかも今夜10 時から闘牛騎士のコリダという何やら不明の闘牛があるというのである。 馬に乗って闘牛するというのは覚えがない。 見たことがない魅力には逆らえず、大枚180フランの席を買っ てしまう。 ま、馬相手なら牛も殺されずに済むだろうと多寡をくくる。

その後海岸を歩いていて、砂の魅力には勝てず日光浴をする。 海水着を用意していなかったのは不覚である。 フランス人とアラブ男性の子連れが結構いて、その屈托の無いところ、フランス人の鷹揚さには感心した。 キャンプに戻ると、反対側にテントを張っている若い夫婦連れがドイツ人らしいことがクルマのナンバーで分か る。どうもまた眼を付けられそうな予感がしたので、先手を取って《ヤー 御機嫌如何です》 と話かける。 ドイツ人はどうも良く分からない所があって、時には、東洋人がキャンピングカーを駆ってこんな景勝地に来る などということを、自分の領分が犯されたような気分になることがあるらしい。 アルルのキャンプでは同じよう なキャンピングカーのドイツ人夫婦には眼を付けられて往生した。 何やら様子を窺って、その姑息なこと、イン テリらしいのに、誠に惜しい感じがする。 話掛けた夫婦はマトモで、いろいろ情報を交換する。 ここには5年来3 週間滞在するのが決まりなそうな。 後 1週間あるといい、陽に良く焼けている。シュヴァーベンの庭園師だそう で、庭を造るのだそうだ。 フランス語は駄目らしく、残念ながらここでの知り合いには限度があるらしい。 庭造りについていろいろ教わりたいへん有益 。 個性のあるドイツ人に出会うのは極めて稀れというのがこれまで の印象である。 何故印象かというと、一生で知り合える人の数は限られており、パーセンテージでも表すことが できないからである。 キャンプ中を例の闘牛の宣伝車が走り回って宣伝している。 ここは巨大なキャンプなので、こんなことでもしな いと人が集まらないのだろう。 この夫婦は闘牛は見たこともないし、見たくもないという。 ま、ドイツ人ならそ ういうだろうと思う。 食べるために殺す訳けでなく、意

味もない屠殺としか考えられないのだろうと思う。 夫婦の意見では、今夜の闘牛はスペイン闘牛で、馬上とはいえ牛は殺されるぞと嚇かす。 しかし闘牛というのは どんなものなのか体験できるのは興味深い。

8

闘牛場

アレーナの前は大変な人だかりである。 満艦飾のメリーゴーラウンドが騒がしい音楽を巻散らしながら廻っている。 町中の人々が集まっている感じがする。 子供達が大勢駈け廻って騒々しい。 然し照明 が交錯する中で良く見るとスペイン系の体型の人々が多いのが分かる。 胸が厚くどっしりしている。 矢張り闘牛はスペインの国技なのだ。 どういう訳かスペインの観光客が多いのにプロヴァンスに入ってから気が付いた。 アルルでは大きなトレーラを引いたスペイン人達がキャンプしていて、毎晩大皿のパエリャを料理し、騒々しく酒盛りをする。 太陽と海とワインは本国でも十分味わえるだろうに、態々フランスまでやってくるのは理解ができない。 尤もこんなことができるのは金持ちにちがいないが、ケイタイで本国の息子や孫と話しているのは微笑ましい。 多分失われたスペインを再発見しようと、カマルグの自然に惹かれてやってくるのだというのなら少しは理解できそうだ。 日本人だってモンゴルの草原にその起源を想起して訪れる人もいるのだから。
さて今夜の闘牛は闘牛騎士対牛の闘いで、牛は確実に殺される。 アレーナに入るとコンクリートの階段が取り巻いて、4、5千人の観客が円形に座るようになっている。 周囲の観客はどうもスペイン系の人々らしく、ガヤガヤと試合前の興奮で賑やかである。隣に座るスペインの青年は巨大な望遠レンズを付けたニコンを持っている。 双眼鏡を持ってくるのを忘れたのは不覚である。しかしこのアレーナは2万人入るというアルルのそれよりも小さいので、隅々まで良く見えるようになっている。 右側に赤い制服の楽隊が陣取っていて、突然ファンファーレを吹き鳴らすと、その下段から六人の騎士が次々に馬上豊かに登場する。 万雷の拍手が沸き上がる。 みなこれらの騎士達を見知っているらしく、特に唯一人妙齢の小柄な美女が登場すると人気者らしく大変な拍手である。 これらの騎士の乗馬技術は大変高度のものである。 いわゆるスペイン乗馬といわれる伝統が結晶した もので、顔色一つ変えるでもなく、目に見える動きもなく、馬を自在に動作させる大変な技術である。 この6人がアレーナを様々な体型を作りながら織り成す乗馬の粋は見るに値いする。 人馬一体というのはこのことをいうのであろう。 馬も素晴らしく悧巧で俊敏なことが、一頭ずつ見ていると良く分かるのである。 観客は見せ所を良く知っていて、右足を上げて挨拶する動作などは大拍手で喝采するのである。 騎士達の晴れやかな微笑は見てほれぼれする。 そしてアレーナ全体を興奮の坩堝に陥れるのである。 これは儀式であるということが良くわかった。 この種の儀式は日本にもあるぞという誇りが頭をよぎる。 それが何か直ぐに思い浮かばないが、何やら宮本武蔵辺りの決闘に合い通じるものがありそうだ。 生死抱き合わ せの決闘は一種の儀式である。こう思い当たって、次に来るべき残酷な場面へのはらが据わった。 ドイツ人

ならこうはいくまい。 彼等は観念の塊まりである。 生死の問題を 彼等は考えるべきではないと教えられている。 フランス人も死ぬという言葉は口にしてはいかぬと教えられている。 日本人はへっちゃらで、死ぬまで後悔しません、などという、 神を恐れぬ言葉を口にするのである。 その点スペイン人はどうなのかは良く分からないが、 どうも生死のことは我にあり、という気がする。 さもなければこの闘牛の儀式は生まれなかったであろう。

時代を越えてこのアレーナに宮本武蔵と佐々木小次郎の決闘が実現したとすれば、恐らくここの大観衆は瞬時に全てを理解して、固唾を飲んで真剣の行方を追ったことであろう。

一番手は例の美女の剣士である。 仲間から次々と祝福を受けて、アレーナの左端で黒牛が 現れるのを　馬上で待つ姿は　絵のようである。　馬はその方角を見るような、見たくないような風情であるが、耳はピンとその方角に向いている。 騎手は背筋をピンとのばし不動 である。楽隊のファンファーレが吹かれると、観衆の溜め息のよう などよめきと共に、黒牛がドドットと柵からアレーナに躍り出る。 白馬はジーっとその動きをハッキリ捉えているのが分かる。 どういう牛か分析しているのである。 この牛は少し小柄のような気がしたが、確かに6番手になる程、大柄で強い牛が選ばれていることがわかった。　この牛は悧巧で、馬に追い着かぬと分かると追跡を止めてしまうのである。 その都度 徒歩の剣士がケピを持って間を持たすようなこともしなければならない。 しかし馬 が接近すると猛ダッシュで突撃する。 あわや角が馬の尻を突き破るかと思われるのを僅差で逃れる馬の感覚と馬上の操作は見事で、観衆はそれに酔うのである。どうもこのスピード感は徒歩の闘牛士のそれとは段違いのように思われ、これを見ることができるのを幸運だと思った。　何本かの花剣を背に負いながら、血を流して立つ雄牛 の姿が勇壮に見えるのはどういうことなのか不思議である。　何度かの突進の後、騎士が止めの長剣を受け取って、牛にに追わせながら、突然角に直角に転換した瞬間に闘いは呆気なく終わった。 手練の早業で剣先は牛の首筋の髄を刺し貫いたのであった。 止めは心臓でも突くのかと思っていたのは間違いであった。 これは隣りの青年に片言のフランス語で教わった。 雄牛はそのままつんのめって即死であった。 大観衆は熱狂した。 これ程見事 な闘牛は見たことがないという風であった。 美女の剣士は馬上で歓喜の声を上げ、馬から飛降りて牛に駈け寄っ た。 牛は微動もしない。 完璧なコリダであった。　牛も馬も常に動いている状況で、脳髄を然も特定の角度でしか達しない急所を突くなどということは神業に近い。 事実その後の牛は一頭を除いて、馬上からの刺殺は出来な かった。 それにしてもこの可憐な美女の剣士は恐ろしい人である。微笑みながら牛を殺したのである。

次の牛には美青年の剣士が対決する。 その前に立て札を持った男が、牛の出生地だか、持ち主の名前と36番というようなことを観衆に知らせる。 多分牛にも出生地により個性が違い、特別足が早いとか、角の動きが早いとかいろいろな特性があるのだろうと思われる。 こういうことを事前に剣士は知っているのだろうか興味がある。 しかし馬には教えることはできない。 馬は眼 前に雄牛が姿を現した時に、瞬時に認識しなければならない。 この時剣士はどうやって馬に闘いのやり方を伝達するのか興味深いものがある。　馬によっては、牛が躍り出た瞬間に、全てを承知したという仕種をするものがあり、前脚を上げて、文字通り馬と牛の闘いという感じになることもある。 ここに出場する六頭の馬は大変なベテランである。　牛を良く知っている。 牛の強さによ

って剣士は 馬を乗り換えることがある。 一頭では息が切れてしまうらしい。 牛にも適当に息休みをする間を与えている。 牛は前半、花剣 (正しくはどういうのか分からないので、こう呼んでおく) を5、6本背に受ける。 これは牛を怒らせるのが目的と思われるが、さして痛がっている風にも見えず、ましてや弱っている風にも見えないので、どうもよく分からない。 隣りの 青年に聞こうと思うが、ニコン　に夢　　中になっている。 それに彼のフランス語では頼りないこと夥しい。 後ろに座るその知り合いらしい　伯母さん連中はフランス語ができるようだが、後ろを向いてごたごた話をするのも気がひける。 この青年剣士は見事な手綱捌きで観衆を魅了する。 牛は実に強い。 馬の尻を徹底して追いまくる。 物凄いスピードである。 馬も負けじと、角の先端を瞬時に察して尻を横飛びに転 換して切先をかわすのである。 このような時、騎士がどういう指示を馬に与えているのかは定かではない。 馬の本能に委せているのかも知れぬ。 ただ騎士は絶対 に牛から目を離すことはない。 結局この剣士は馬上で止めを刺すことはできなかった。 何度か急所に当たって、ヤッタという風な仕種で、牛が倒れるのを待ったりしたが、牛は倒れるどころか追撃を再開するのである。 徒歩の剣士が数人が歩み出て、 牛を弱らせる作戦である。 この時の 観衆は大不満で、剣士達は徹底敵に罵倒された。 剣士は馬から降りて、柵越しに、闘牛士の長剣とケピを受け取り、徒歩で牛の正面に歩みよる。 牛は眼前と両側に赤いケピを張られると、どういう訳か首を前に伸ばして瞬間不動になる。 その 瞬間　を捉えて剣士が止めの剣を与えると、牛はそのままどーっと倒れる。 しかし観衆はどよめいて、不満を表わした。 剣士も不満足そうであった。 立場がないという風であった。 馬上での止めでなかったことは矢張り不名誉なことが良く わかった。 翻って、この牛が2頭の美しく飾られた馬によって引かれて、この勇壮な雄牛の栄誉を讃えてアレーナを一周して去る時、大観衆は全て起立して、拍手をもって見送り、かの青年剣士も拍手して見送ったのは印象的な光景であった。 牛にも栄誉があるのである。 牛も ただ殺されるだけではないのである。　このロジックはドイツ人には永遠に分かるまい。